

の当日のお答えは、*sacra doctrina* から切り離して、*philosophia thomistica* を展開することを努力するべきだという趣旨だった。

終わってから、お三人にそれぞれ小さなコメントを個別に付け加えさせていただいた。(1) 川添さんには、*scala entium* ということを現代の人にわかるように話すのはとても難しいでしょうと申し上げた。(2) 鈴木さんに申し上げたのは、Spinoza の哲学は日本人によって伝統的に親しまれている(波多野精一、出隆など)、それは Spinoza 哲学が Christianity から自由だからだろう。当時、Pantheism と評され、ゲーテほかドイツの文人、哲学者に親しまれたのも同じ理由によるだろう。それは、どなたかも触れられたが、Spinoza 哲学の Jewish 合理主義によるのだろうかということだった。(3) 村上さんには、わたしの質問に関連して、Pascal の言葉に村上さんがどう答えるかが、質問の席上であり、村上さんのお答えは、「それは Pascal の誤解で、Pascal が *Meditationes* をよく読んでいないからだ。」だった。わたしはあとで「でも、*Discours* が一人歩きするということが事実上あったので、そういうこと(パスカルの言葉)はやはり問題になるのではないですか。」と申し上げた。——これらの問題点はすべて今回のシンポジウムでの討論をうかがっていてわたしのうちに形成された問題だった。いずれにせよ、熱気あふれる討論であり、中世哲学会の密度の高さを証明するものだったと思い、慶賀したい。

ただし、帰途、道連れになった熱心な学部生、修士学生から「シンポジウムは難しかった」という率直な見解表明を聞き、なるほどそうかと思った。シンポジウムに今回の学会の頂点があったことは認められても、司会者が触れた原因論とか *causa sui* の話は一般には手に負えなくなるのは目に見えているからである。

意見 14 世紀スコトゥスやオッカムの存在論の特徴

渋谷 克美

今回のシンポジウムをとっても興味深く聞きました。鋭く明確な口調で、デカルトとトマス、オッカムとの関係を述べた川添氏、中世哲学と近世哲学の合流点としてスピノザを捉え、彼の自己原因概念を詳細に検討した鈴木氏、カントからトマス、アンセルムスへと遡る仕方でも神の存在証明について考察した村上氏の御発表は、多くのこと

を私に教えてくれました。ただ、「中世から近世へ——存在論の変容——」というシンポジウムの題から考えて、中世から近世へと移行する14世紀のスコトゥスやオッカムにおいて顕著となり、近世へと繋がる存在論の特徴に関して、三人の提題者が言及しなかった点を補足したいと思います。

14世紀のスコトゥスやオッカムの存在論の特徴の一つは、「神はこの世界とは別な世界を造ることができる」として、我々の世界の非必然性 (contingens) を強調していることである。例えばオッカムは、「実体は量を持つ」「人間は理性的動物である」を非必然であると述べる (Ockham, *Summa Logicae*, I, c. 24, 26; III-2, c. 7; III-3, c. 2)。なぜなら、我々の現実の世界Wにおいて実体Xは量Pを持つとしても、全知全能の神は実体Xが量を持たない世界W1を造ることが可能だからである。あるいは神は、Tの時点で多くの選択肢 (P, Q, R) からP (身体と知的魂の複合体の存在) を選択し、それゆえ我々の現実の世界W1において人間が存在する。しかし同時にまた神はPではなく、Qつまり人間が存在しない世界W2を造ることも論理的に可能だからである。スコトゥスによれば、Qが論理的に可能である (esse possibile logicum) とは、Qであることが矛盾を含まないということに他ならない (Scotus, *Ord.*, I, d. 2, p. 2, q. 1-4, n. 262; d. 43, q. un. n. 7; *Lec.* I, d. 7, q. un. n. 32; d. 39, q. 1-5, n. 49)。全知全能の神はその絶対的能力によってあらゆることができるが、矛盾を含むことはできないというのが中世哲学に共通な理解であり、従って、神によって思考され、認識され、可能世界において生じさせられうる「論理的に可能な存在」とは、矛盾を含まないものでなければならない (より詳しくは、拙論「スコトゥス、オッカムにおける様相論理と可能世界論」中部哲学会年報第34号, 2002を参照)。更にオッカムによれば、「神がこの世界を創造する」、「神は創造主 (creans) である」ことも非必然である。神は世界の創造をやめることも可能なのであり、神がこの世界を創造したことは非必然だからである (Ockham, *Summa Logicae*, II, c. 10)。こうした存在論が、神の絶対的能力の強調と結びついている。こうしたスコトゥス、オッカムの存在論はスアレスを経てライプニッツやデカルトといった近世哲学に影響を与えている。ただし、オッカムの議論にしばしば出てくる「神は……ことを行なうことができる」という言い方は、そのことが論理的に可能であり、矛盾を含まないことと同値であるのに対して、デカルトは永遠真理創造説において、「神は矛盾することも行なうことができる」ことを認めている。